論壇

安全への〝ココロ探し〟

三上和幸
(財)国際交通安全学会
専務理事

In Search of a Heart for Safety

Kazuyuki MIKAMI
Executive Director, IATSS

〝ココロ探しの時代〟という電車の中吊り広告コピーが目に止まった。〝主役は「モノ」から「私」へ〟という続きなどから、ファッションの傾向がブランド志向から自分だけのものへと変化してきているという記事内容を示すものであろうことが窺われた。このとき〝ココロ探しの時代〟という言葉が雑誌の記事の表題から離れて、妙に私の心に残った。

昨年の交通事故死者は11,227人と三年連続して一万人を越え、その増加の趨勢に歯止めがかからず、深刻な情況を示している。交通安全施設等の整備は、昭和46年度から平成2年度までの四次にわたる五箇年計画の実施によって約六兆円の巨費が投下され、さらに本年度から第五次五箇年計画がスタートする。交通事故抑止対策として、このような「施設整備」—「モノの整備」—は主要な施策の一つであり、これによって多くの人命が救われてきたことは今更申すまでもないことであるが、これだけで十分でないことは事故の現状が如実にそのことを物語っており、道路交通に関わる人々（ヒト）、そしてその意識（ココロ）のありようが大きく影響していることを現わしている。

スイスのベルン大学心理学教授のアルフレッド・ランク氏が本誌のインタビュー（Vol. 14, No.2）で、「日本の運転者には、自分が直接対面している人に対しては配慮があるのに、そうでない場合は無配慮になることもあるようです。たとえば、そこに駐車をしたら他の運転者に迷惑をかけることは明らかなのに、かまわず駐車して、車から離れて行ってしまう。『人に対する配慮』と『物（車）に対する無配慮』という二面性があるようです」と述べているが、昨今、人にも自らにも、また物へも配慮を欠くことが常態化してきているように思う。ランク氏の指摘した違法駐車の問題は都市機能を喪失させるものとして、昨年、道路交通法、車庫法の改正をみ、他律的な機能の強化によってその解決を図ろうとしている（もちろん、その実効をみるためには、法の意図を人が受け入れることが肝要であるが）。

このような傾向をもう少し例示すると、自動車乗車中の事故死者が全事故死者の約40%を占めるまでに増加し、特に若者の暴走等による事故も目立っていること、シートベルトの未着用者が各種の調査からみると、一時の数%台から30%台に増加し、「面倒だから」「窮屈だから」「自分は事故に遭わない」といった自己中心的な理由が上位を占めていること、走行中の車内から空缶などを〝ポイ捨て〟る傾向も後を絶たないことなど枚挙にいとまがない。これは、程度の差はあるにしても個人生活が〝豊か〟になり、金さえあれば何でも手に入るという〝モノ〟中心の考え方が蔓延する中で、〝自らを他と調和させて生きる〟という日本人の最も得意とする生き方を失ってきたからではないかとも思う。

最近、〝人間らしさとは何か〟〝本当の豊かさとは何か〟とか〝心と物の調和した社会〟という言葉をよく耳にする。これは社会全体が喪失しつつある〝モノ〟と〝ココロ〟のほどよき合致、人間が人間らしく生きることへの模索を意味するものではないだろうか。安全への〝ココロ探し〟—といっても、〝青い鳥〟は他を探し求めても求めることはできず、自らの中に、〝安全なココロ〟を揺るぎなく確立することが大切である。

原稿受理　1991年1月21日